町民文芸

只見短歌会　令和三年六月詠草

夜半一人寝れずに浮かびし歌一首書きおかねばと筆をまさぐる　馬場　八智

草むしれば又生えるぞと日常のかけ合ふ言葉に温もりの有り　目黒　富子

風かをる新緑の候(こう)癒されし山の頂残雪も見ゆ　関谷登美子

老いぬれば子に従へ の諺にツツジの植ゑ替へ息子に習ふ　新国由紀子

連休に来し孫帰ると顔を出す握手の中に小遣ひ持たす　渡部ゆき子

毎日の運勢見つつ今日の日を吉と思ひて日々を過ごせり　渡部ヨリ子

食事終へ広き廊下に集ひ来し入所の人等の話は弾む　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　六月定例会

宇多喜代子　指導

梅雨上がり二人元気に畑仕事
夏座敷友の手土産食べながら　真理子

青空をすっぽり包む若葉かな
画面から飛び出してなお水遊び　修一

山道に咲きしうつぎの美しさ
世の道は一難過ぎし春遠し　睦子

桑の実に唇染めしガキの頃
寝ころびて眺める空や半夏生　信

朝に夕腰に蚊遣を燻らせて
獣らは耳そばだてるはたた神　恒夫

幼子の指差し数えチューリップ
山笑う足腰庇う鍬の先　都

招かれて雨後のバラ園にぎにぎし
丹精のバラ大輪に風そよぐ　礼

久々に生れし女子(おなご)やレース着せ
草刈機振り廻してる夏帽子　一穂